

研究課題名: アットリスク精神状態群の症状の活用と援助希求能力向上を目指す心理面接法の開発

研究種目: 基盤研究 (C) (一般)

研究代表者: 京都文教大学 臨床心理学部 教授 松田真理子

(概要)

研究目的は、アットリスク精神状態群（精神病発症危険群、At Risk Mental State; ARMS 以下 ARMS とする）の自我親和型体験（違和感がない）と自我違和型体験（違和感がある）の弁別および建設的活用、援助希求能力の向上を目指した心理療法的面接法の開発である。前駆症状は当初は本人にとって違和感や不安全感を伴うことが多いと考えられるが、経過に伴いそれらが自我親和的な体験となり、症状と共生しながら学業や仕事を続けている人達がいる（松田ら 2015、2022、2023）。症状は本人にとって苦痛をもたらす場合が多いが、無理をしていた生き方を振り返り、本来の生き方を見出す絶好の機会となる場合もある。また幻覚や妄想などの症状、希死念慮、思考実験がむしろ自殺を食い止める場合もある（生田 2000）。ARMS に対しては認知行動療法が推奨され、多くの成果を各研究者が報告しているが、本研究では ARMS に対し PrimeScreen 日本語版、永井（2013）の援助要請尺度、陰性症状評価尺度（SANS）と陽性症状評価尺度（SAPS）を用いて、症状と共生しながらも社会生活を営むことができる建設的側面に焦点をあて、それらを心理面接の中に導入することを検討していく。

※令和 7 年度研究計画書より抜粋